

輪池雜記

二

特別
15
1663
2



乙大行

大行

一里塚

日高見田

鴉尾

龍尾道

文錢

永樂通寶

竊貯文庫



源弘賢著

言語部

起しけ

起しけとる洞二川あり一ハ鄙^{ヒナメケ}蘭の精語を

本手記古抄本
見ふかしくなり

修徳子田舎をたるとし義あり

源氏物語より本手記おはるる海くはことば

あやこみしれとみ意ほくおしをせし

うたはれのみさしにあつるるまは月ひあつる

精記をり新り一ハ浸とる義あり浸混渾

源弘噴著

地理部

たうげ たむけ

たうげ 及び山乃嶺と云ふ古ハたむけと云ふ 百葉集

其にタケと云ふ名ハ特ニ一物也 百葉集 至高嶺

と書てタケと云ふ是即この義なり 手供の義なり

御座ふそのタムケと云ふ名百葉集に僅し

二三首のみ見たりその一ハタウケと特ニ云ひて

新古今にもあり 堀川百首 やそ百葉集より後ハタムケ

乃手紫に香ぬきとよめおとらぬゆりーやうりー一旗
とたムケとらうけぬきの手供と別するうりー上は弁する
たて

源弘賢著

國郡部

日高見の國

日高見の國といふ常陸國信太郡の舊名ありと日本書紀常陸風土記

大倭日高見之國といふ大和國を並稱するあり大倭

此外日高といふ地名ありと國といひ一ハ

この二ハよめをまじりし

日本書紀景行天皇廿七年春二月辛丑朔壬子武内宿禰自东國還し奏言东夷之中有日高見之國

之國人男女並推絡文身為人勇悍是也曰
夷去地沃壤而曠之

天武天皇^{釋曰日本紀引之}行廿七年春二月辛丑朔壬子

行巡幸將軍武内者祢殉海陸來奏曰日言見

國志所謂天府也之地沃壤其賦上々々倭接壤

獨擅山東之利刻才刻面被毒發髮自補推夷

日本書紀景行天皇廿八年冬十月壬子朔癸丑

日本武尊教路云之流上總將入陸奥國云之地

夷既平自日言見國遠之西南歷常陸至甲斐國

常陸國風去記^{公覽社記引之}云信太郡古老云難波也

豊前^{孝佐}之天皇出世癸丑年小山上為初内大山之

物初倉津等摠領之向久之支等之流波落城

七百戶置信太郡此地本日言見國云之^{弘備曰流波之流城也}

^{分ちてんよ今の所信太の地あり一御うに今も}
^{信太郡ハ新治と河内郡の間にあり古今の變革也}

常陸國志云今考舊事記但德國造總一百四十

四國新治以下六郡為國每常陸國又據日本紀及

風土記说有日言見國是上世以來有此七國之

系乃天皇始置國造後世又置六十六國而并

七國為一百名為常陸國乎然考日本紀有歷

常陸之語自古已有常陸國亦已尚矣今并敘說

考之別有常陸國与七國地相錯未可定
具至廢教國以隸之常陸國者与毎之考成
乞或之于一方亦未之知也并存臣待増君
子耳

延喜式大被詞云四方之國中 之 大倭日之見國 乎

これ大和
玉といふ

和歌

支本抄卷老三十

國

ト部 蓋直

現存六 出日見之國を安くしと稱す未と稱せしん

弘實曰この方大和の詞
にふりてをあらぬ多し

釋名

日高見國 日本書紀常陸風土記云是和記云四方を言を 日高

又之國 大被詞祝詞考云やまの四方の志秀あるとありて天つ
日の高此志中にあると見ゆしと云ふ古よりいひある言を

此の言を此志中にあると見ゆしと云ふ古よりいひある言を
こを又出ん命と海神の言は日高と云ふと云ふ也此の言を
へし又記し陰皇ふり又國記あり日高國部ある和記に
かく四方の言を言ふを死ゆと云ふや名つけむにや由と云ふ
さる言の言をいひ後後云山をくしして折てはて平は廣き
地をいふ山のち地地とていひ此の言の同趣く見ゆみふ
こと位と云うりて日高と云ふ言をいひ山と云ふの言の
るをくしして日高と云ふ言をいひ山と云ふの言の
廣く平なり地と云ふ言をいひ山と云ふの言の
弘實按まらに後釋の祝詞を言ふと云ふ言をいひ山と云ふの言の
地生部日高見神社と云ふ言をいひ山と云ふの言の
日高國部木その地廣平なるやその國の人をいひてと云ふ言をいひ



一里塚 封埃

一里塚は天文九年に將軍家乃作して諸國より
 かせ給ひ信長とありたり記其の時乃將軍
 家と足利義晴公なり世中みまらふおら
 たり諸國もそのつとゆえにけんいふ
 たりそのつと天正年中織田信長公卅六町ふ一
 里塚を治まじけふよりいへ本朝世是も尾
 張美濃あつりにとゆへに事談はるる慶長
 九年二月四日台徳院殿乃作して東海道越後路
 陸奥路お一里とふふ西塚とありかせらる樹

と植ゑめらるるにたふふ天野信景いゝるるよりせり
も天下にあまゆきなり景塩たつたつた皇朝
にて里法とゆふ也ゆひ大寶の時五人と
歩三百歩と里と令誰とたつたつた
卅里と小驛をとくといへるの卅里も今の
三里十七町にあふふそれの際とんと
かれぬんのさもさは三百歩を里と
せしは唐令よりれたふ何故
唐の封城といくらいの封
城は軒轅不起と紀原いひく古記と云ふ

嘉式にも新路の樹と植ふとはありとも六の事
とるゑと弘安年中に至りて高野山の町平夜婆
といふものを立らしと野山名いつりとしら
や一里塚なりとはくあとりふへさり
信長記云天文九年冬將軍家にて諸國へ作らせ
四十町と一里と一里塚の上に松と榎を植ふ按
去年六月は利義晴公は八瀬の里へ赴かせゆひ
て都よもたまさまさまさまさ三好の業類
せしといふや
本朝世事談綺云天文年中信長公三十六丁に一
里塚をいふといふといふと

家忠日記云慶長九年二月 台徳公諸士ニ命シ
テ東海東山北陸ノ三道ニ一里塚ヲ築シメ玉フ
天正ニ織田信長分國ノ中ニ一里塚ヲ築シメ地
ノ卅六禽ヲ表シ一里ヲ卅六丁ニ究メ家上ニハ
復ヲ植ケルニ此度モ准セラルヘキ旨有司ニ命
セラル中夏諸國其功ヲハル云ニ 武徳大成記武徳編年集成等
同皆
上野國高崎宿舊記云慶長三年戊四月中山道往
還開之御高札掛云ニ同九年辰二月諸國路道可
仕由ニ候廣五間一里塚卅六丁ニ築云ニ

天野信景塩尻云慶長九年二月四日 台徳大相
國東海道越後道奥州路等ふ命シテ各一里ニ一小
両塚ヲ築シメ樹と植シメたまふ同年五月下旬
にとく成就セシ今に残テ約八里程と安と皆
公乃たまもものあり

蓑輪軍記云長野業政もみのとにたてこころふと
子息業盛をめ遺をいいされけふと云と我死セ
も一里塚をかしにけさこめ 按ニ此軍記も慶長
十二年の後かき
けふと書中に證ありされも此送云もけふか
くははるへしよて永禄中より一里塚ありしに
も有へ
からと

和漢三才圖會云封堠 里堡音俗云一里塚五里
有一堠云按一里堡每一里空小山樹以松或椶
古道町五十今道町六十有異如中夏五里一堠則町三十
其五里不足於和之一里

事物紀原云道路之記以里堠起軒轅時也

韓文路傍堠詩云堆路傍堠一雙復一隻迎我入

秦關送我入楚澤云々

野山名靈集云町率堯婆奥院より慈尊院より
町率堯婆は弘安年中大師の沙告と蒙て遍照光
院の覺教法印走まるとふふちり後嵯峨の上皇を

とらめより奥列の國司何某鎌倉二位の禪匠相
摸國司沙弥大蓮及松下の禪匠お壇主とて貴
賤共々其名とあつてもせり種子は小川乃僧正信
範漢字は世尊寺經朝卿の筆跡なり其祈願文も
同筆にて所影堂より納し給へりされも昔より
代々の君臣沙弥の所記皆此道と經る也給ふ
のこあつて白河院并より所堂園白殿も慈尊院よ
り一步に三礼し給ひて沙身を苦しめ給ふ後宇
多院は山中沙步なりけふとくや將末信何り
て登山せん人も心得給ふへきとあつらん歎

白河燕談云客問一里塚町石應有漢土哉答曰事
文續集二曰韋孝寬為雍州刺史先是路側一里置
一土墩經雨頽毀每領修之自孝寬臨州乃勸部內
當墩處植槐木代之既免修復行旅又得庇廕周文
後見恠問知之曰豈得一州獨爾當天下同之於是
分諸州道路一里植一木十里植二木百里植五木
北史又云魏文帝迎薛靈芝大道之傍一里置一銅
表五尺以志里數日本町石倣之欵
客因問漢土六町為一里本朝馬不爾耶答曰和漢
全同以單六町為一里馬譯等迫近故疊六之數以

三十六町定一里六是老陰數而地亦陰也或隨少
陰數重六八數以四十八町定一里共偶數也於十
今時羽奧列等以單六町呼一里也須知按今乃
一里とたりむりりこと
しく里法の修まるるん

正誤

擁書漫筆云塩尻一乃卷に慶長九年二月四日東
海道越後路奥列路お命し各一里おふと
といつりされと一里塚はとやく菘輪軍記し出

按し卷末に永禄二年二月廿二日己卯里て其時
日に成しおとく聞ゆとととに何ら其後書
たふおちり又内藤信成文中に六年三月十八日
みえきり又内藤信成文中に六年三月十八日
もその家譜より一乃後僧内藤子清て業盛と奉り
記中し法如とりの僧内藤子清て業盛と奉り
乃一男秀吉公乃一乃後僧内藤子清て業盛と奉り
年一男秀吉公乃一乃後僧内藤子清て業盛と奉り
馬郡高崎に居たりと次小大熊氏梶山氏西人郡
赤坂とあり地高崎とあり改て稱も長十二年菘輪と

禄の山子孫と名あり世にありては
然枕の末元和の流のりやま
業長の乃造云は信流のりやま
業改乃造云は信流のりやま

古今要覽卷第

居處部 宮殿

鷄尾

鳥

鳥

鬼狀頭

鬼籠子



鷄尾ハ宮殿の東の角あり。其物母て乃ち唐
名林邊の流に玉を多割た
惟るる流を在ち官上院
移り下玉を備用し蓋目
戸始也毛割没物者あり
鳥吻所のありき

施鷄尾

辨色立成云
久都加太

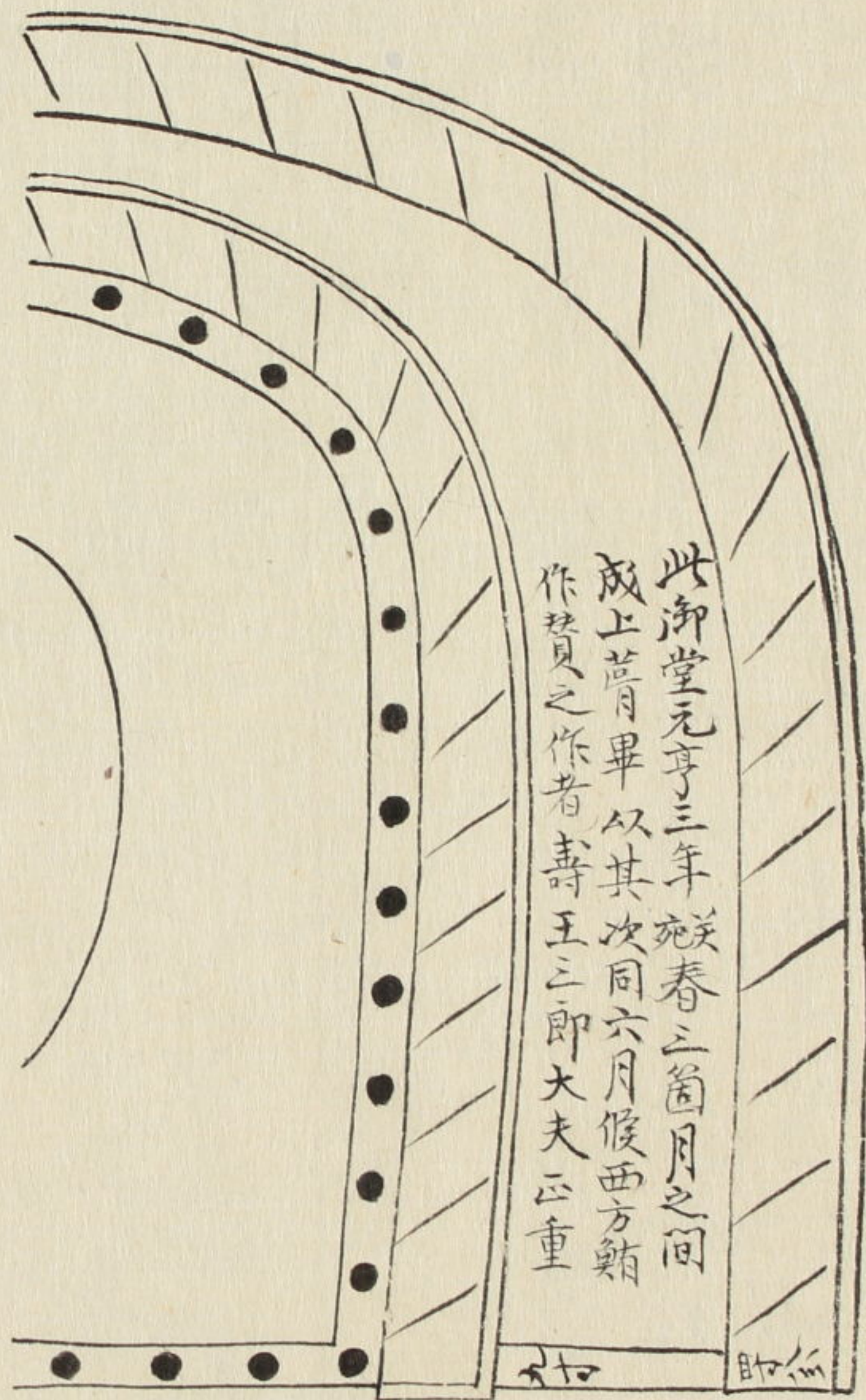
少存在せり即鷄尾

あはれなる鳥の付くものありき

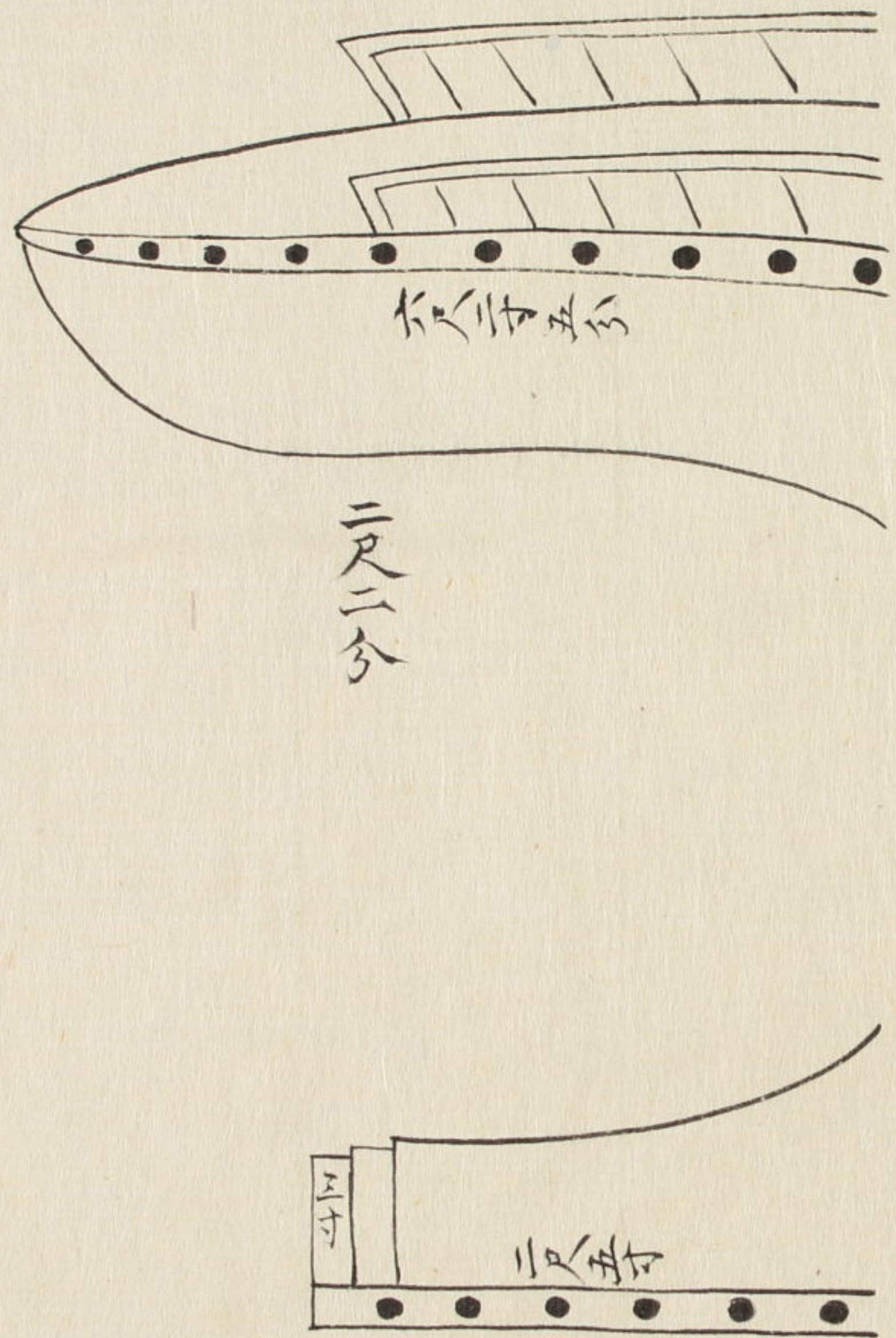
平城宮の御車馬を唐招提寺に移して遷都して今に至るまで
 錫尾二河あり東は舊物今も存し西は被燒して元亨の御車馬は
 同物に銘あり
 新物に銘あり

錫尾圖

銘 籙と書るは
 倭借あり

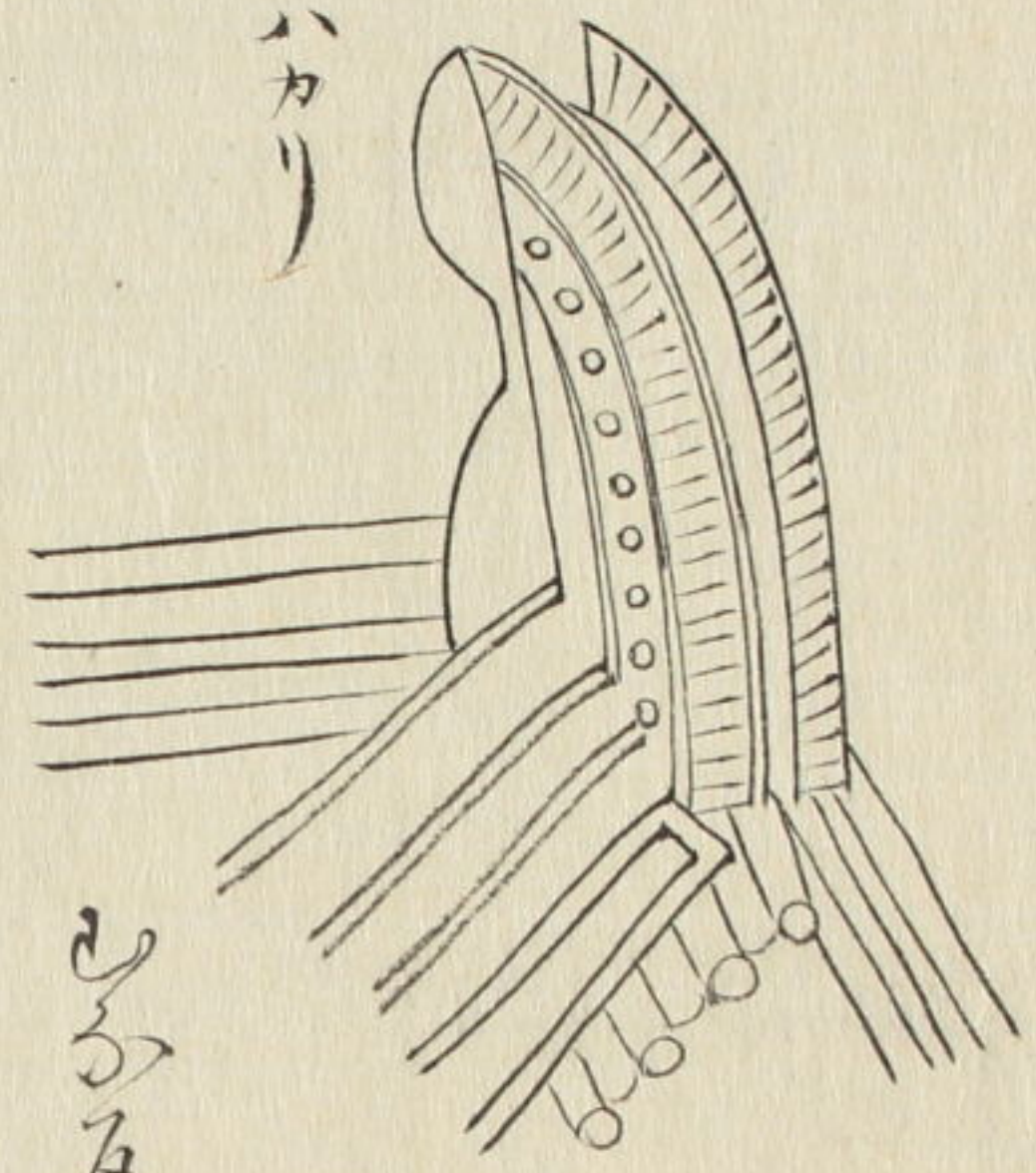


此御堂元亨三年癸卯春三月月之間
 殿上骨畢以其次同六月假西方籙
 作贊之作壽王三即大夫正重

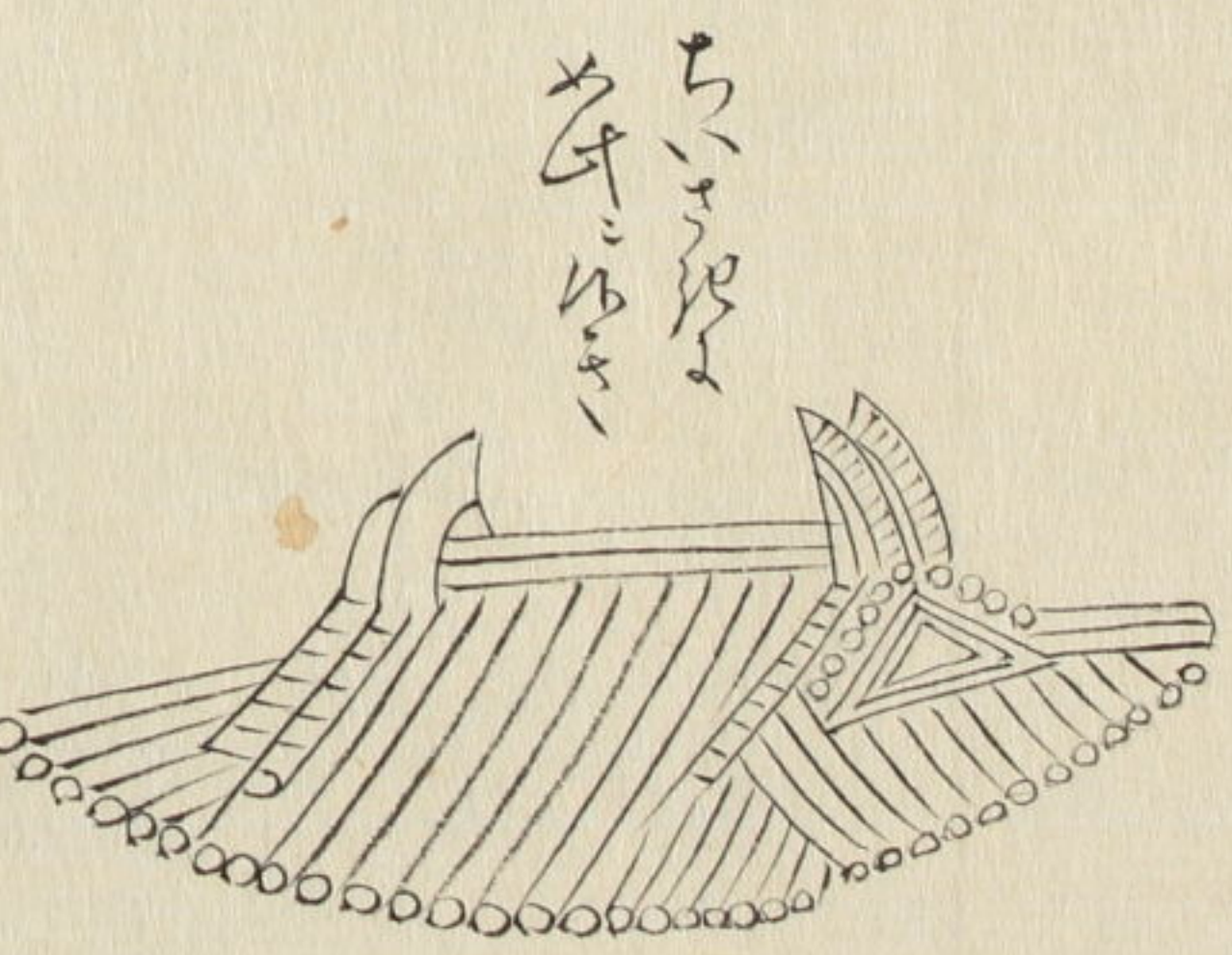


白石先生手書云平城の船吻と云ふカ又と後集の
 心得るるに存るは然天内裡の繪を身々に附令

のこや千ボコと申すものゝ外はちひらて香の
 形をしてふを流るゝと云ふカヌエは戸をなすもの
 有るものゝ外は唯今の制法を存したるものも
 ありぬるを非ざるにん、
只今の制法を存したるものも
 唐招提寺に存するものも
 ありぬるにん



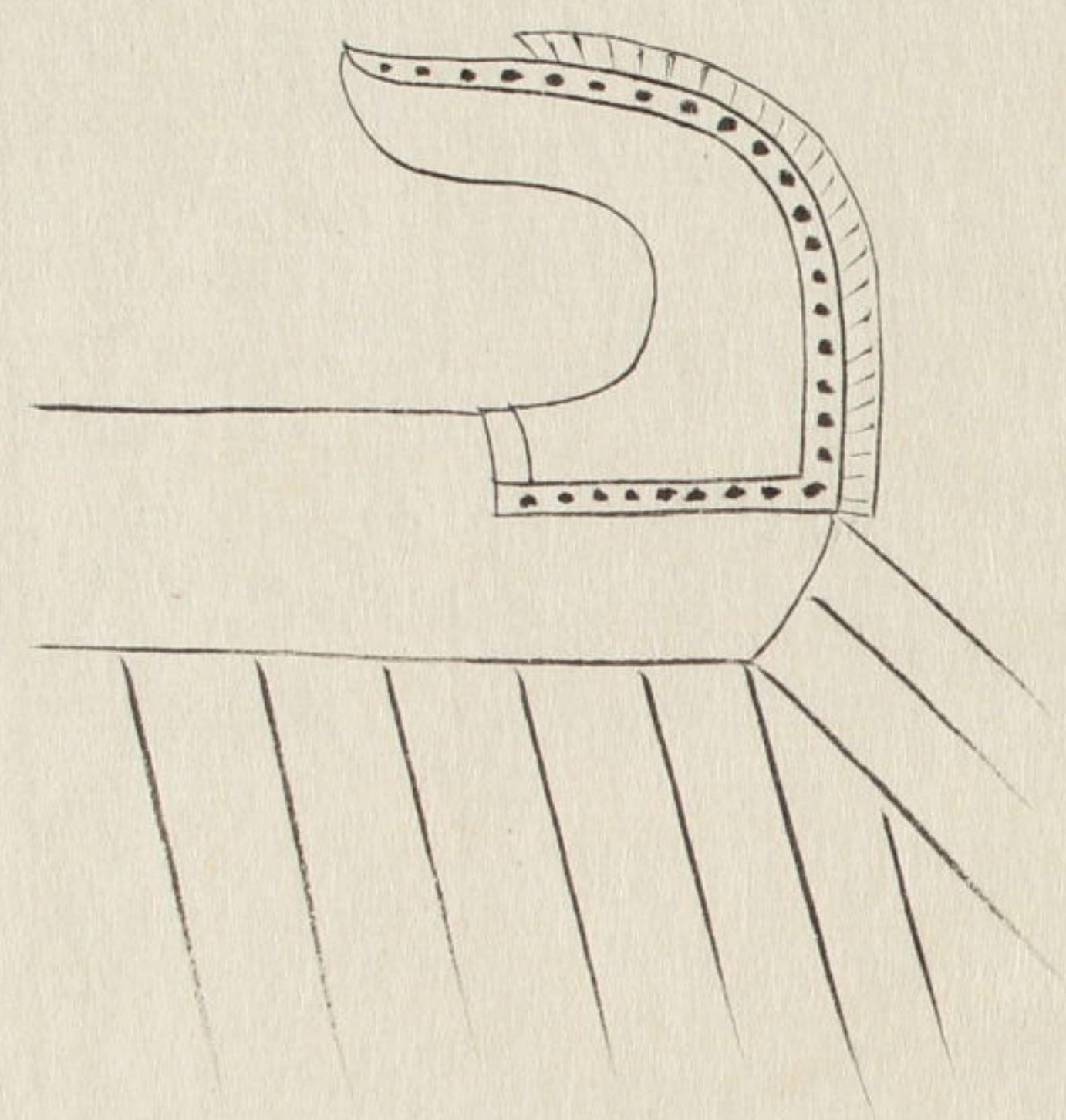
くらがたハカリ
 金也



ちひらて
 やすいゆき

ひら尾

弘賢按する小此図特字の程ありや 屋脊の
 施とふ分相するす唐招提寺の金巻に施す
 たる如し



西之の書と按るる小鵝尾又ハ鵝尾或ハ蚩尾又祠
尾或ハ鵝吻又ハ鵝吻又ハ吻頭又ハ吻吻也
△之類と云ハ鵝吻の所より起る也
後ハ獸也
一川也

吳越春秋子胥の園周築

之故因越王已地有能也

而吳王居之位也

角後餘漢書上及月る多親以也

作木身居一也

梁殿災越巫言
遂作其像於屋
獻術取鵝魚尾
以鵝演義曰漢武
辟火災可置之

堂殿今人多作鵝字顏之推亦作鵝劉孝孫事始
作蚩尾又俗間呼為鵝吻如鵝鳥遂以此呼之後因
有作此鵝者王子年拾遺記曰縣治水無功自沈羽
淵化為玄魚海人於羽山下脩玄魚祠四時致祭嘗見
澆灑出水長百丈噴水激浪必雨降漢書越巫請
以鵝魚尾厭火災今鵝尾即此魚尾也按王嘉晉人
晉太漢末遠當時已作鵝字蘇鵝之說亦未為允
也吳處厚青箱雜記曰海有魚虬尾似鵝用以噴
浪則降雨漢柏梁臺災越巫上厭勝之法起建章
宮設鵝魚之像於屋脊以厭火災即今世鵝吻是也

西の書と按ると小鷓尾又ハ鷓尾或ハ蚩尾又祠
尾或ハ鷓吻又ハ鷓吻又ハ吻頭又ハ鷓吻也
て其物の漢名ハ魚なりといふ其後の獸もとい
又星を象するといふ龍の九子其一也なりといふ
事

事物紀原云鷓尾唐會要曰漢柏梁殿災越巫言
海中有魚虬尾似鷓激浪則降雨遂作其像於屋
以厭火災王獻炙穀子曰柏梁災巫獻術取鷓魚尾
置於殿屋以厭勝之今以瓦為之換鷓演義曰漢武
作柏梁殿上跡者曰蚩尾水之精能辟火災可置之

堂殿今人多作鷓字顏之推亦作鷓劉孝孫事始
作蚩尾又俗間呼為鷓吻如鷓鷃遂以此呼之後因
有作此鷓者王子年拾遺記曰縣治水無功自沈羽
淵化為玄魚海人於羽山下脩玄魚祠四時致祭嘗見
澆灑出水長百丈噴水激浪必雨降漢書越巫請
以鷓魚尾厭火災今鷓尾即此魚尾也按王嘉晉人
晉本漢末遠當時已作鷓字蘇鷓之說亦未為允
也吳處厚青箱雜記曰海有魚虬尾似鷓用以噴
浪則降雨漢柏梁臺災越巫上厭勝之法起建章
宮設鷓魚之像於屋脊以厭火災即今世鷓吻是也

香祖筆記云鷓尾之說傳記紛紜不一對類總龜
謂龍生九子一名嘲風好險在殿角一名蚩吻好
吞在殿脊博物志逸篇云螭吻形似獸性好望故
立屋角上螭蚩形似龍性好風雨故用于屋脊三
說已不同唐會要云漢武栢梁殿災越巫獻術言
海中有魚名虬其尾似鷓激浪則降雨遂作其形
置殿脊以厭火災又或謂漢栢梁臺災越巫上厭
勝之法乃大起建章宮遂設鷓尾之象于殿脊二
說亦有不同

黃朝英按倦游雜錄言漢以宮殿多災術者言天
上有魚尾星宜為象冠屋以禳之陳書三公黃閣
聽事置鷓尾蕭摩訶以功寢室并置鷓尾北
史宇文愷傳云自晉以前未有鷓尾江南野錄用
鷓吻

細素雜記云作鷓為字恐無意義古老傳云垂從耳
尾出于頭上遂謂之蚩尾

類要云東海有魚似鷓噴浪則降雨唐以來設其
象於屋脊

格致鏡原曰鷓曰魚以耳為目也
法中為漢下也起之也

墨客揮犀云漢以宮殿多災術者言天上有魚尾
星宜為其象冠于室以禳之今自有唐以來寺觀

舊殿宇尚有為飛魚形尾指上者不知何時易名
為鴟吻狀亦不類魚尾 同上○事實類苑室作屋自作亦

升庵外集云俗傳龍生九子不成龍各有所好弘

治中孝廟御書小帖以同內閣李文正公其疏以對

據圭峰羅玘蘆泉劉績之言承上同而不敬下臣

之美質相之感節也文正嘗為慎言今影鄉音記之

錄於一曰鼉形似龜好負重今石碑下龜趺是也二

曰螭吻形似獸性好望今屋上獸頭是也 下畧○五雜俎云龍生九子云

金吻好吞

金臺紀聞云昔鴟鴞氏生三子長曰蒲牢次曰鴟

吻好望以飾屋今之吻頭是也 續秘笈

顏氏家訓云或問曰東宮舊事何以鴟尾為祠

尾答曰張敞者吳人不甚愁晷古隨宜記注遂鄉俗訛

謬造作書字身吳人呼祠祀為鴟祀故以祠代鴟

志やちやくこ

志やちやくこハ魚の伊勢海よ生れ其の長ハ

五七尺より三間小ハ其の性剛ハ鯨ノ性ト似ル

大なる其の城門ノ棟ハ重ハ其の形ハ魚ノ物

ト志やちやくこハ俗名アリ今ハ此魚ノ形

ト志やちやくこハ其の既ハ鯨ノ性ト似ル

ト志やちやくこハ其の既ハ鯨ノ性ト似ル

云墻垣似龍鱗魚布似龍皆立石屋上者今殿庭
 曰物衙舎曰獸頭大抵皆崖也殿庭為龍形衙舎
 為獸形或為魚形以別於宮殿皆以意為之非
 本則也此に官舎の衙舎と別を以て為す也此形或は
 獸形魚形と云ふも皆意と云ふを以て之とすべし
 此人の造るに物も凡もおもひ
 粟山先生曰狀ハキンのおれもキギントウと唱ふ
 べきとの情多しと後時、通多ありて中道也

源弘賢著

宮城部

龍尾道

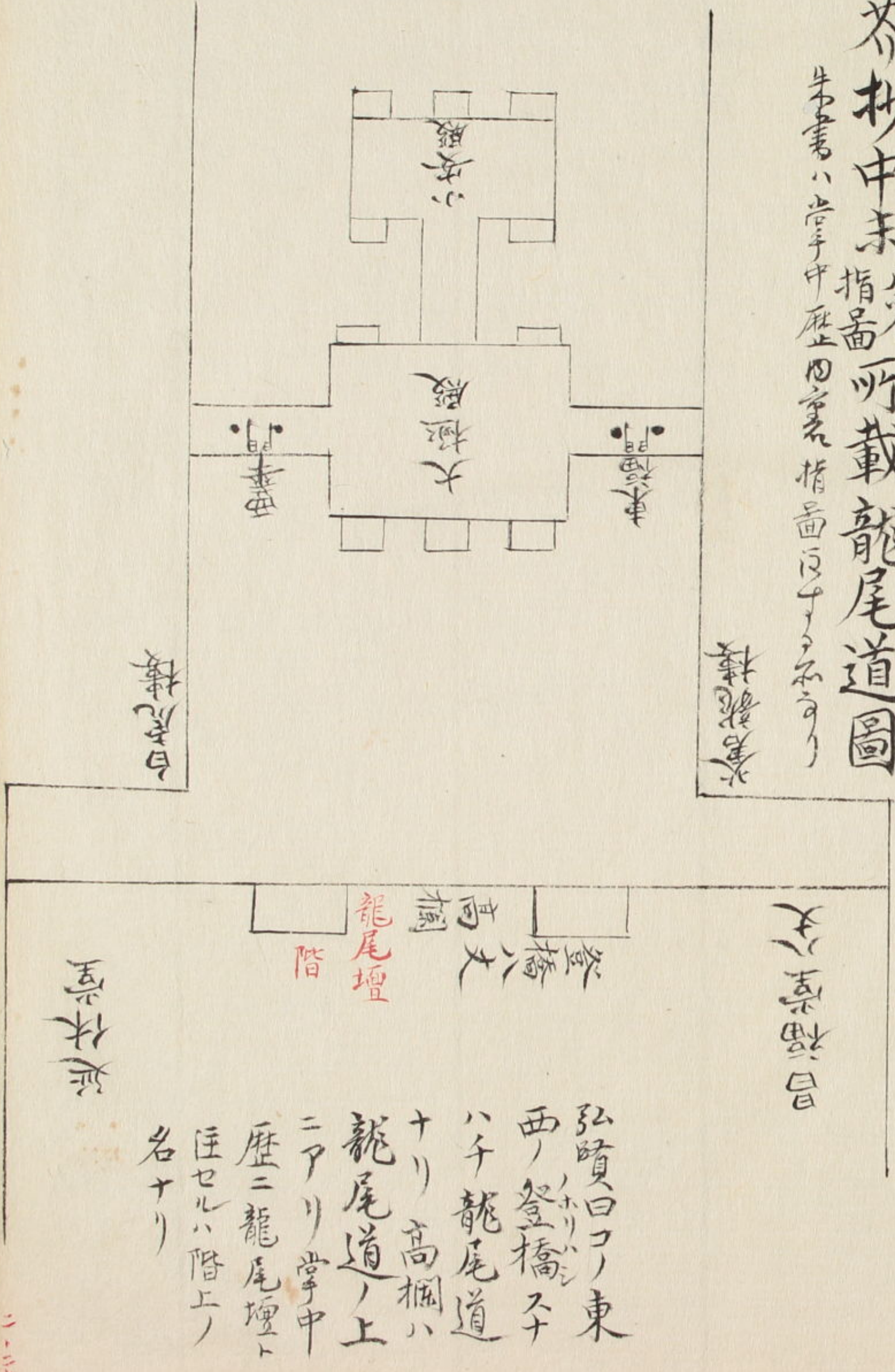
龍尾道ハ大極殿の東ありハカリ櫓乃名あり此
 登橋東西よりつゞきあり各ハ大あり非
 老を及上に高欄あり松芥抄年
 中納言後此と龍尾
 乃と云ふといふ李唐の大如字にあり此の名
 目といふといふなり大如字の西殿と舎元
 殿といふもの殿の東に龍尾たあり殿あり

乃石階と云ふ也その石階と二層とあり上の
 一層ハ石階とて下の二層ハ階と記すなりて
 塙とわびて東西二層とつらり東西とたれぬの
 乃七曲あり丹鳳門 金之殿の西の門 より是と云はん
 その七曲の左龍の屋と垂たること一階と
 は不龍首山乃林藤たよりゆつとこれと龍尾に
 比して名付しるの **名義**と云ふゆるる
 一階と云ふの事 雍録長安志の石階と云ふ事この石
 階ハ石欄と記してその石欄と東
 西各三の階改と造りの事と云ふ
 龍尾なる名了らば此の事 **和** 小皇朝の制
 七曲ありと云ふも **龍尾**と名付しといへ

名付しと云ふはしるる

拾芥抄中末 八省指番 所載龍尾道圖

牛車書ハ高手中歴正四宮名指番ハナリ云々



同上禁中所、異名

蒼龍樓 東謂之龍尾道、東樓

白虎樓 西謂之龍尾道、西樓

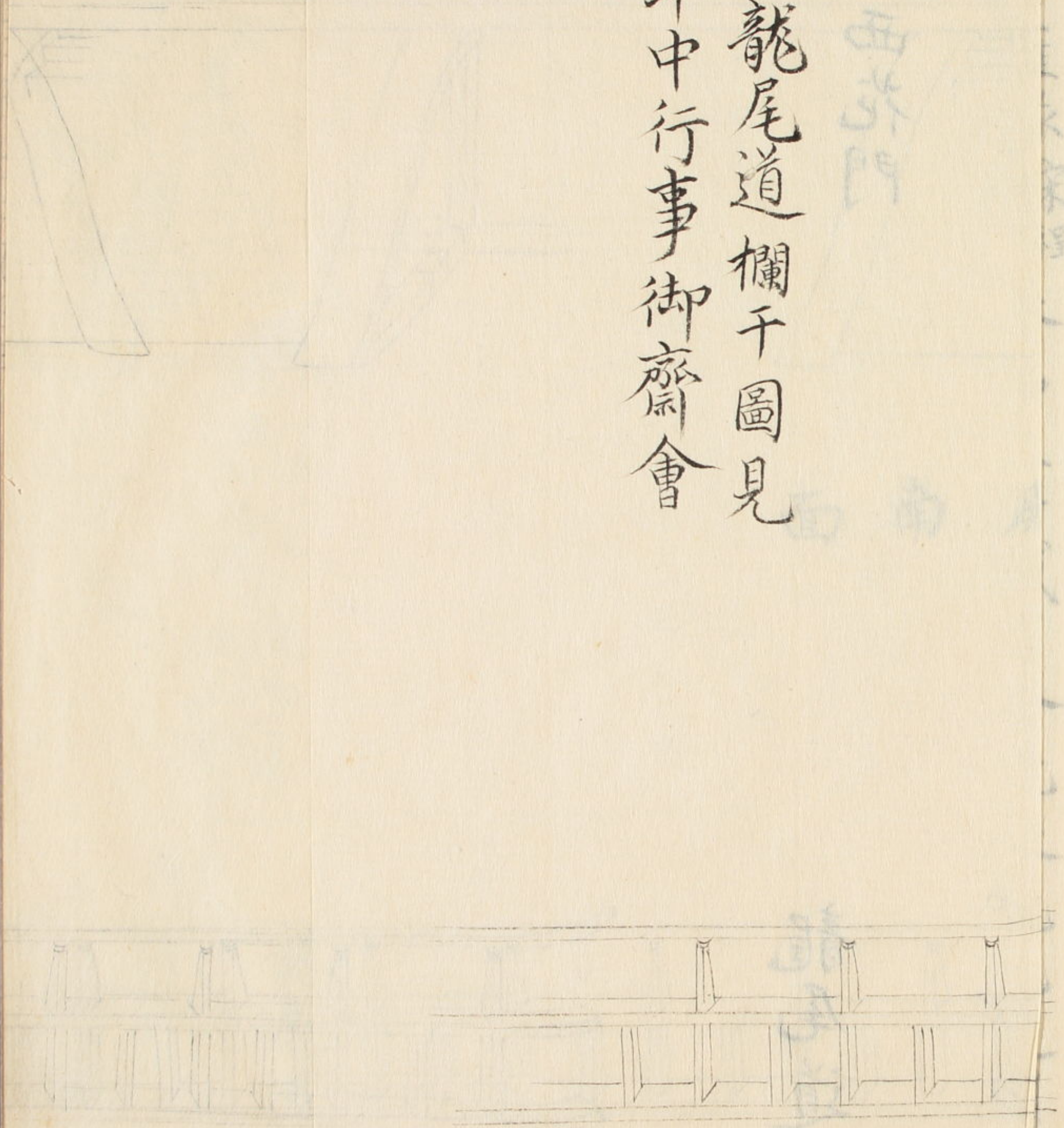
昌福堂 大極殿、東起、北為弟

延休堂 一堂、龍尾道、南

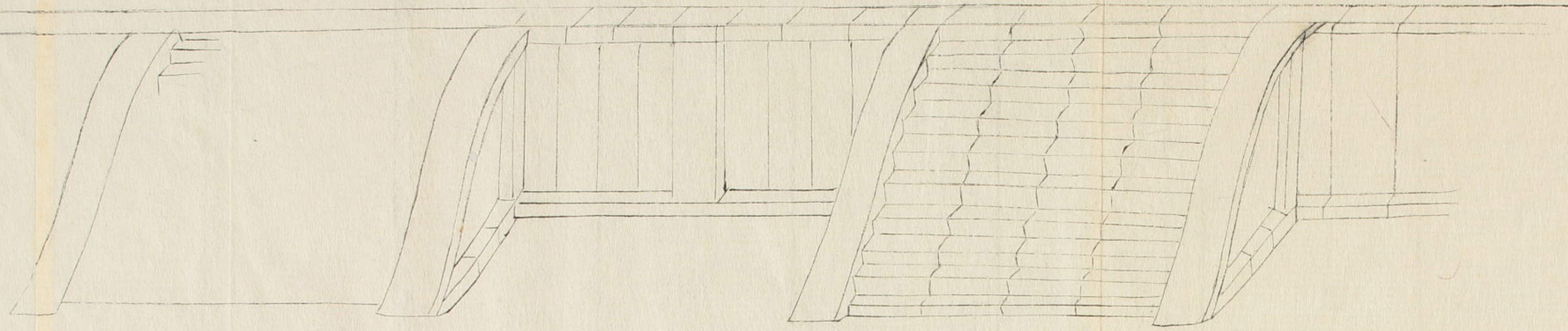
大極殿、西起、北為弟
一堂、龍尾道、南

弘賢曰この四條のほ又くよりてお園の登橋と
ほきくもの即 龍尾道なること志すなり

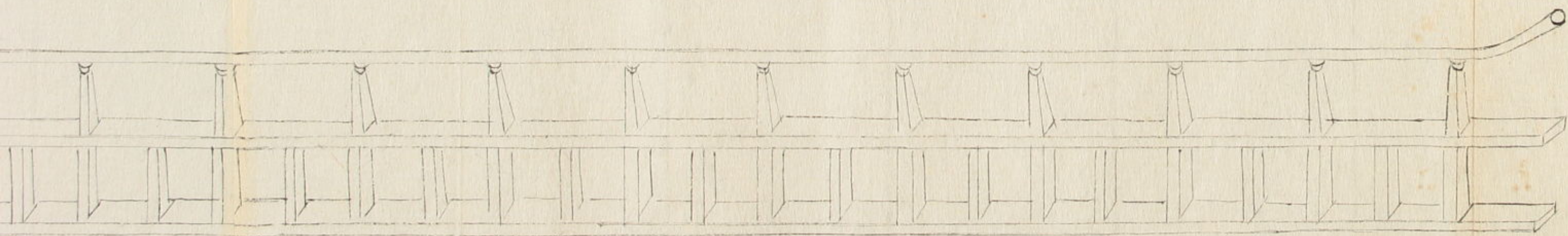
右龍尾道欄干圖見
年中行事御齋會



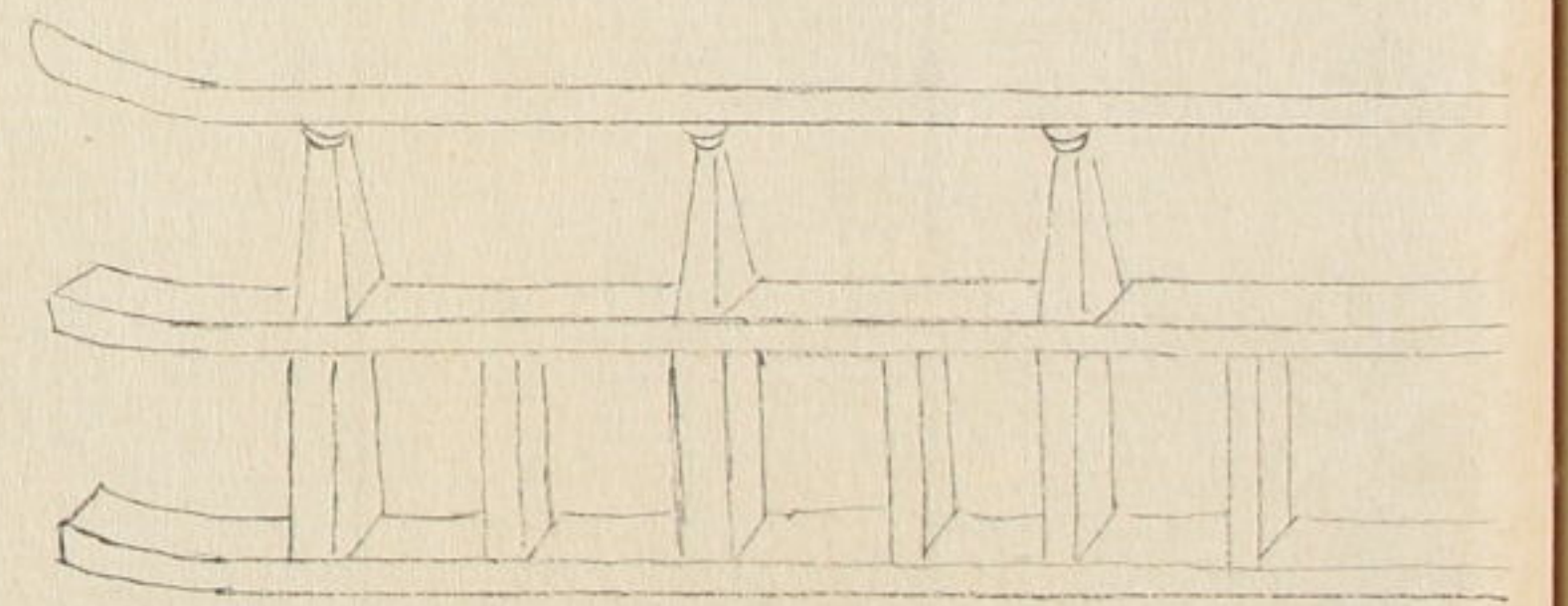
東福門



大極殿南面

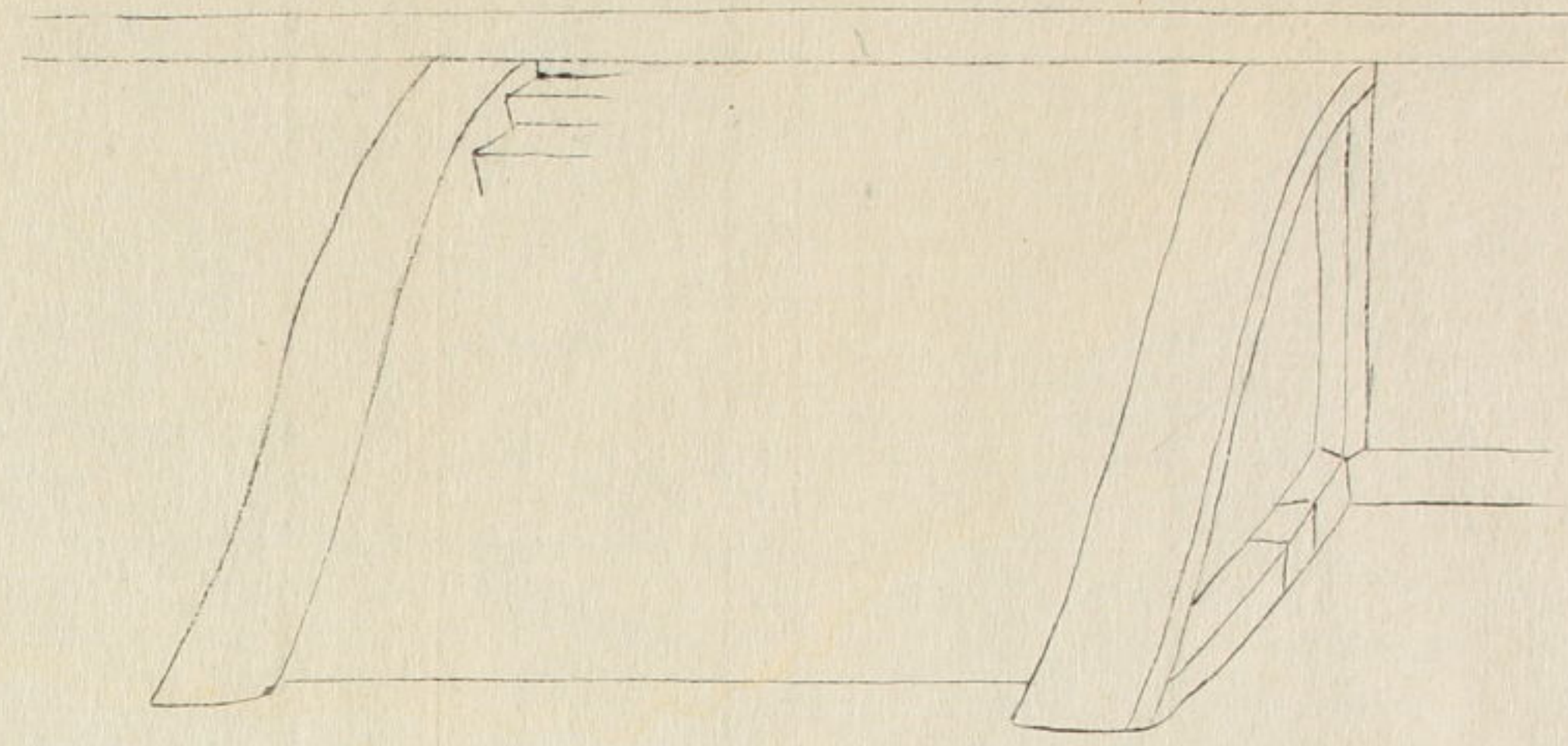


龍尾道東階

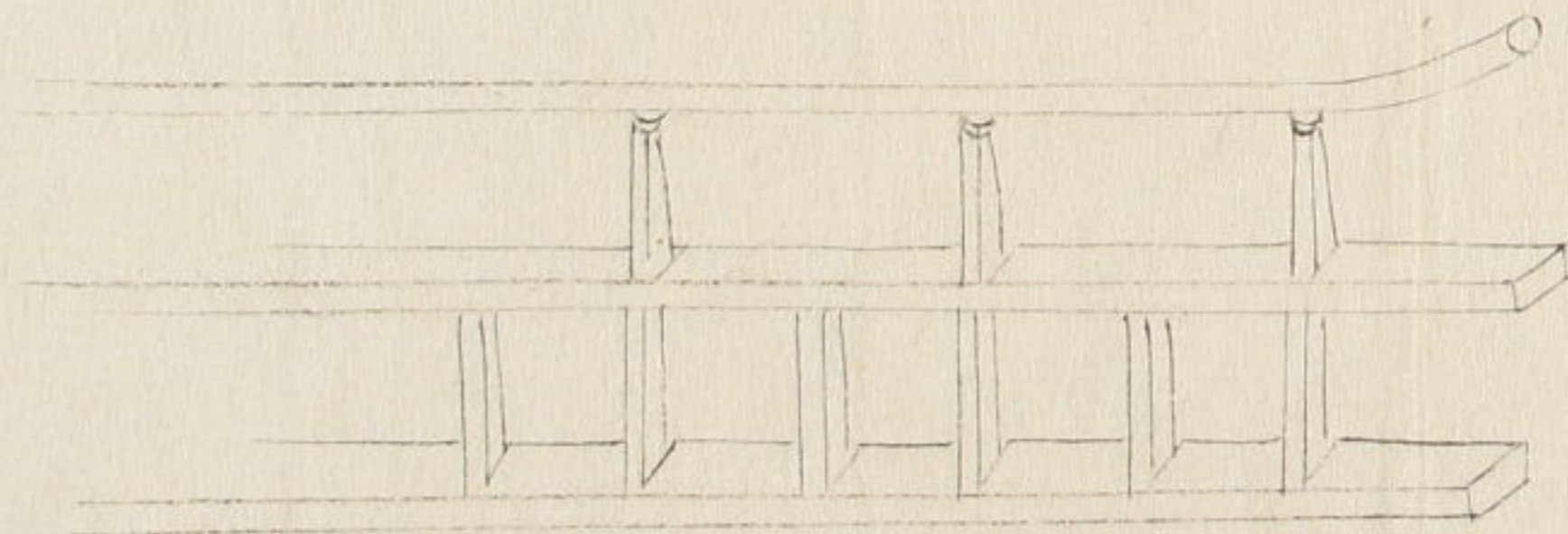


右龍尾道欄干圖見
年中行事御齋會

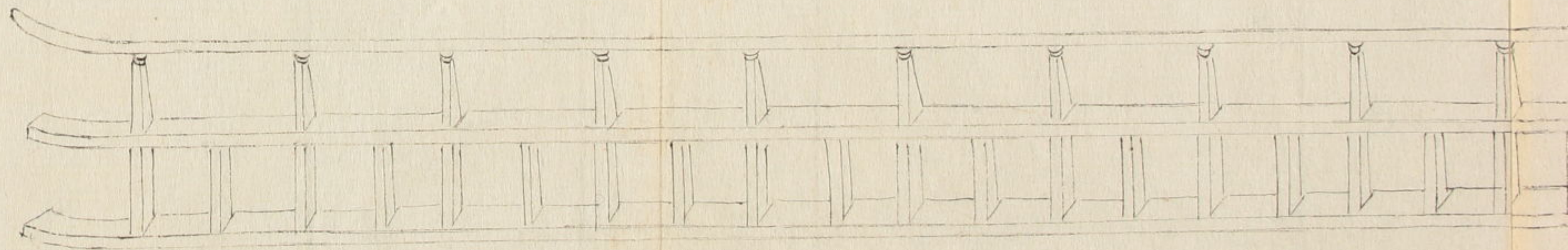
西花門



面



龍尾道西階



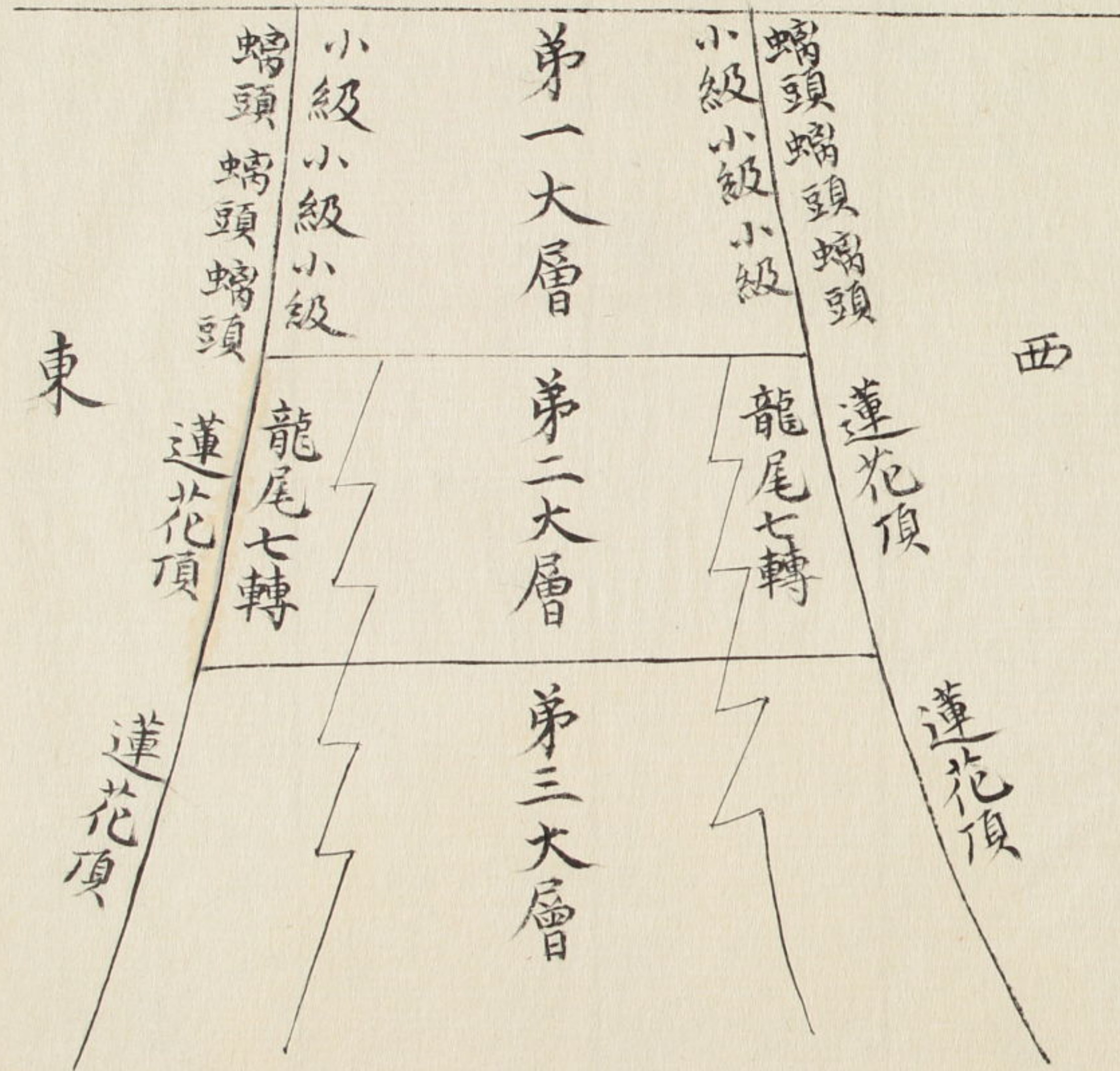
弘賢曰下文
及長安志
據レハ此圖
東西ヲ
アヤニレリ
棲鳳閣
鸞七地
易(キ也)

雍錄 宋程大昌

卷第三所載唐含元殿龍尾道圖

棲鳳閣
西朝堂

東朝堂
翔鸞閣



東齋門

段極大

龍尾道東部

龍尾道者含元殿正南升殿之道也賈黃中談錄曰
含元殿前龍尾道自平地凡詘曲七轉由丹鳳北望
宛如龍尾下垂於地兩垠欄悉以青石為之至今石
柱猶有存者兩京新記曰含元殿左右有砌道盤上
謂之龍尾道按此即龍尾之形像名實皆昭然矣康
駢劇談錄曰含元殿左右立栖鳳翔鸞二閣龍尾道
出於閣前殿門去南門二里元會來朝者仰觀玉座
如在霄漢

含元殿南疏階升殿凡為三大層自下而上其下兩
層皆培土鋪埽為坡陀施元斜道不疏小級其鋪埽處透

迤屈曲凡七其轉故自丹鳳門北望則如龍行而垂
其尾是以命為龍尾道也龍尾云者亦附並龍首山
為義而立為之名也此之龍尾也者其培土處合為
一階階上所鋪埽道則分為兩可以引班對上故仁
裕曰階尚面龍尾道各六七十步也龍尾道者其兩
畔亦有石欄石欄柱之頂止刻蓮花不刻螭頭矣
長安志宋敏求卷第六云大明宮云丹鳳門內當中
正殿曰含元殿即龍首山之東麓也云殿左右有
砌道盤上謂之龍尾道

類聚國史

云延曆十八年正月壬子豐樂院

未功成大極殿前龍尾道上擬作借殿幕以彩帛
天皇臨御

續日本後紀曰承和十二年正月乙卯外從五位下
尾張連濱主於龍尾道上舞和風長壽樂大嘗會
御櫻記云大嘗會大極殿於龍尾道の前には是と
造立也又云小三丈許と云て廻立殿と立

江家次子河齊舍始式部彈正度龍尾道前
著東西廊座

同河齊舍竟雅樂寮著龍尾道東西階壇内方奏左
右舞各一曲改書云唐令宮元殿前有龍尾
及諸曲七持苑必於尾

愚昧記云仁安三年十一月廿二日下於龍尾道壇上可

後腰輿云々

世俗淺深秘抄上云々於龍尾壇疑道壇上駕腰輿

大外記師元記永萬元年七月廿七日御即位兩儀
武兵兩輔相引降龍尾道置案云々部後馳道自西階可降
不以旨不用垂降

延式式部云受法蕃使表及
尾道下

信物其日式部没使者殿位於
龍尾道南庭没庭實位於塔
前

未功成大極殿前龍尾道上擬作備殿幕以彩帛
天皇臨御

續日本後紀曰承和十二年正月乙卯外沓五位下
尾張連濱主於龍尾道上舞和風長壽樂大嘗會
御禮記之大嘗宮大極殿於龍尾道の前に是と
述立と又云小三丈許と云て廻立殿と立

江家次身御齋會如式部彈正度龍尾道前
著東西廊座

同涉齋會竟雅樂寮著龍尾道東西階座
右舞各一曲改書云唐令宮元殿前有龍尾
及諸曲七持宛必於尾

愚昧記云仁安三年十一月廿二日下於龍尾道壇上可

後腰輿云々

世俗淺深秘抄上六十於龍尾壇疑道壇上駕腰輿

大外記師元記永萬元年七月廿七日御即位兩儀
兩輔相引降龍尾道置案之部後馳道自西階可降
也予雖不以肯不用垂降

自東

又云宸儀初見以間雨降天暗自龍尾道下
遙拜之間妻不奉見

和歌

夫木和歌集

雜十二

林系中月

法性寺入道園白

空のめすきれぬ月とて人かゝる跡の屋は

寶貨部

文
大佛鑄

大佛鑄を京に大佛像乃銅を用て鑄
於ある字何故く小佛像に銅を用て鑄
に鑄らば一處にありてありてあり
寛文二年の地蔵小佛像に用て鑄
字易たし此處に用て鑄に改む
鑄に用てありてありてありてあり

源弘賢著

そつてのり又五月より七月までありて
洛中及徳國北堂塔佛閣大半崩壊し也
万天日録山城名跡志
艱難日異誌 六月より三月まで御像修理
ありしに五月より北地震ありし
御像ハ其時大小破壊し御像修理
ありしに六月より三月まで御像修理

萬天日録云寛文二年^{壬寅}三月廿四日ノ
午ノ刻大地震翌廿五日ノ夕陽其色丹
ノコトシ夕日ノ影ニツニ見エ夕リ
一 同年同月京ノ大佛ノ像修理始ル是ハ

中ノ柱ノ榕朽タル故ニ七尺ホトカ夕
ツキタルニ依テ十リ右破損ツク口イ
ニ七寸角千本計モ入りタルト也夥敷
事也

一 同年五月一日大地震大雨フルコノ地
震都ハ取分夥シ 禁裡ノ御築地ハ取
々ツユリ崩シ朔日ヨリ四日マテノ尸
イダハ毎日廿七八度三十度ニ及テ震
ヒ七月ニ至テ猶止ス依テ洛中ノ堂塔
佛閣大半ユリ崩ス大地ハ一尺計ツ、

上三ツレ小路ニノ家々崩土烟立テ冷

シ弘賢曰ヤオ修カレク大坂及江州并國ニ此至舎破壊
の事と記せり大此付リ大佛と破壊をシナク

山城名跡志云大佛殿本尊始木像後以

銅鑄造近世及破壊故復為木像弘賢曰元禄
十五年沙門

白慧所撰ナリハ後
是より

祿迄京薩云此大佛をひてより

是より有しハ福をくくるとり

と来さいこうもろまたうん

くしゆつ志やうの徳もあ

けとるふまたり弘賢曰此書著述の手代洋るす
こととて序刻の終歳を記す

考まてん寛文延宝此のわく
と一極にんを是又天変

艱難目異誌 三卷當時印行書

今年冬寛文二年此冬寅のころ

朔己のちくつに空の塵

灰此立ゆひを致るに

烟あやあやしむと

何とつ志は

是出と下畧むう文徳天皇乃

二年五月子日此大坂

大佛此改をゆり

せり六北たひの地履にそる系船の大佛
の修造りをも先改をもとて小なりなり
奉りぬ目ことし手場日周をいよる金剛
六丈の佛像を奉んぬううまことり
て切らんとせりすおことんはくもん
その初とて四王切利の二巻れうす
弟もあそ水俣坤袖の下もそる
らんこの物もよくおんおん小織に
あしき大なるえゆりて大佛殿
もこの地志んとはひ

すはうらうらく佛の骨ありて今
無間地獄にゆりて後之百人なり
日用此のここと一同に奉るなり
衆もあ南を釋迦如来切敷うに
奉りぬわきうらうらおん
とて日用此のここと一同に奉るなり
下初ふらりて打つて奉るなり
なれりの紙持るなり
奉りぬ者もこのここと一同に奉るなり
此や日用此のここと一同に奉るなり

心之と毎身少志願のれをくして佛に
肩にのかりて手たうにありて居た
日用をとお法教に毎たしく能くも
やしく、少事ありとて、我初めて此
志んたすりて、おほくもれ
弘賢曰わらく、此
うらこも手とて
ふたよれとて、あに毀やにさし、まて、修造のる
ゆり、あに、時、福海の、ま、を、あ、り、打、と、た、か、こ
を、か、こ、も、く、な、り、

鑄錢年代

寛永錢譜云寛文三年至天和三年江戸
龜戸所鑄

近代和錢考云寛文八戊申年ヨリ天和
三癸亥年迄十六年鑄之
古今泉貨鑑
和漢錢彙
是、同シ

鑄錢所掌

近代和錢考云市兵衛師乃加紋なり、後蘇
縫及助茶屋四郎次郎、茶屋長、茶屋、
古く、茶屋、上、御、平、右、衛、門、茶、屋、長、曾、初、と

錢文筆者

寛永錢譜云左衛門大尉伯高庸書
和漢錢
彙、小、正
五位下行左兵衛大尉、過高庸、記、大久保、百山、の、説、
弘文院、春齋、門、人、過、春、達、後、に、左、兵、衛、と、稱、す、

正誤

産、所、

寛永錢譜云此錢毀平安方廣寺銅佛鑄

之源信綱建議也弘賢曰信綱朝臣ハ寛文二年

三月十六日卒去なり万天日祿

小日年二月より佛像修起し心とつひ六月大地震し

いぬと此を候の年後小佛像破壊となり候の建議し

り心とつひ心とつひ又曰候ハ當時執事して四徳の侍後兼伊豆守

あり候に花の百壽と書とす只姓名成記所し心とつひ

心とつひ

近代和詩考云武列川越の城之松平伊豆守

信綱朝臣を中藏時京郊大佛銅像を毀て

鑄とせら心弘賢曰既小上に

國家を報謝云大佛錢京北大佛と毀て

錢とるは是を大佛鑄心と云永の字は取の

とるはあ末

弘賢曰圖に永字は概畫の末に挑筆

をを森は小文鑄を由して寛文は時

鑄ら取し心とつひあやゆをかり文鑄昂大仏鑄して永字聲

壺挑筆有もの之故を少て和詩を一鑄たりせし故本

贋心とつひ



源弘賢著

寶貨部
永樂通寶

△より國東に力を通用しけり。
他海よりゆへに常買ひたり。
天文十九年より國公卿永樂通寶を
と用ひる事にかりて云々
よして三年存続の事そ是年十二
月より信山をわたり也北條五代記
合條記

京華集

相川集也

江山小隱

跋云書乃普克仲

永樂元年に
代記不引唐王年代記
于盛年と云 後文
京華集〇本朝通鑑了
仲正藏主と記され
八百三十九年
北條五代記
中右治乱記 此より△



源弘賢著

寶貨部

永樂通寶

永樂通寶錢ハ明ノ太宗レ永樂元年に

めて鑄ふなり

京華集及北條五代記不引唐王年代記
○明史九年に係るは盛有るは京華集

錢文

く皇朝ノ傳仲方ノ書なり

京華集○本朝通鑑了
仲正藏主と記され

漢々々此國ノ傳りる事ハ百餘年

外その内方りり

北條五代記
中古治亂記

此

京華集

横川景三集也

江山小隱圖跋云書乃普克仲

Handwritten notes on a slip of paper at the top of the page, including the characters '永樂通寶' and other illegible text.

方老人之真蹟也其書法也當時第一真州兼備
自成一家應永辛巳從國信使而南遊蓋奉
鈞命也時大明永樂紀元也於是乎天子以老人
善筆札試御書院遂命老人書永樂通寶四字
鑄之銅錢書相國承天禪寺六字綉之法被贈
我國二人到今榮焉既而畫錦回國云々
應永辛巳
八年也

永樂元年ハ應永十年ヲ有ル横川の此紀
文明六年に係ル

北條五代記

永七年中
三浦 作

云唐の年代記と云々

永樂錢明朝乃此代二千六年にありて是し
海弘賢白明の太祖洪武二十年にありし時ハ即永樂元年
ナリ細述ス永樂紀元元年に於テ是ト云フ横川の紀

の如にも正統ありと云々此年日平ハ應永十癸
引る唐の年代記ありて是也
未の年に當る此年八月より唐船我わつたあり相
又同く年中日平より唐國へ出つたものとして納
ることをし年代記にあり此年より後永樂とて積
算のしけるが、永永七十七年丙午此年より二百九年
にありぬ今此年より三年
四年にあり年宗方たる人より是れを記年
して圖表に記し永樂とて傳へたるなり
はるりしを云ふにこれをして若くはとありて
とるやむの如し其の此年ハ八ヶ國の志也此條氏康
と作けるハ後ハ品々ありて是れも永樂にすなり

ヨリ三日ノ巳ノ刻マテ吹タリノ風前代未聞ナリソノ
日ノ申刻ニ相別三崎浦へ漂船一艘来ル足利満
兼下知シテ印東二郎左衛門梶原能登守三浦
備前守義高奉行シテ點檢ス惡風ニ放タレテ
来ルヨシ申ス付キ船中ノ雜物ノ類品ノコラス
改シ中ニ永樂錢數百貫ヲ積来レリヌナキ船ヲ抑
留シ使者ヲ京都へ上セテ道義義持卿へ申サレ
シニ唐船閩東へ着岸スルハコレ滿兼ノ徳分タルへ
シト仰下サレケレハ船中ノ財寶ノコラスト、メ唐人ニ
ハ歸唐ノ日ソツモリソノ餘分ヲ考ヘテ糧米味噌塩

薪等ソノ外色ニアタヘテ歸船サセラレケリ其後
滿兼評議シテ若干ノ永樂錢閩東ニコノ錢シ以テ
賣買スヘシト議シテ頓テ法ヲ定メ永樂錢ヲ用ラ
ル然ルニコノ錢年シ控テノ千天文十九年ノ頃ハ閩
東ノ諸民氏永樂ニ鑄ト云惡錢シ交ヘテ同ニ直
段ニ用ヒシカハ賣買市町カノ惡錢シ論ニ爭鬪
出来タリ天文ノ末北條氏康八州ヲ下知セシユヘ家
臣山角信濃守定信笠原越前守康朝等シ招
テ氏康評シケルハ鳥目ニ品、アレ氏永樂錢スタレタ
ルヘシ自今ハ他錢ヲ用ヒス閩東ハ一等ニ永樂錢

シ用ナハ民ノ争鬪止ヘシ高賣ノイトクツワイヤス
モ無多魚ナルヘシトテ右ノ趣シ高札ニ立タリコレヨ
リノチハ永樂錢ヲワカヒテ一錢シエリ出シケルユ一錢
ハ自ラ捨リテ上方ヘ上リシユ一此後ハ一錢シ京錢ト
申ストカヤソノ後園東ハ天正十八年七月十日北條家
滅ヒテ東八州ハ徳川殿ノアツカリトナルソノ後園カ原
陣以後慶長九年正月ヨリ盡ク永樂錢ヲ用ヒケリ
然レ兵一向一錢シ捨ヘキニアラストテ一錢四錢ヲ以テ永樂
一錢ノ代リトス去凡ソノ錢ノ善悪シ撰テムツカシカ
リシカハ神祖慶長十一年十二月八日大久保相摸守

本々々佐渡守正信等ニ命セラレテ永樂錢ヲ
停止シテ一錢ハカリヲ用ユヘシト武州江戸日本
橋ニ高札シ立ラルコレヨリナカク永樂錢ス又
レタリ

弘治百慶長十三年十二月八日
相摸守佐渡守ト
大久保相摸守
武州江戸日本橋ニ高札シ立ラルコレヨリナカク永樂錢ス又レタリ

慶長十三年十二月八日

備前

對馬

上野

定

- 一 予子之妻、永樂錢を以てしる事
- 一 予子之妻、永樂錢を以てしる事、但し予子之妻は、後之を以てしる事、予子之妻は、後之を以てしる事、予子之妻は、後之を以てしる事
- 一 予子之妻、永樂錢を以てしる事、但し予子之妻は、後之を以てしる事、予子之妻は、後之を以てしる事、予子之妻は、後之を以てしる事
- 一 予子之妻、永樂錢を以てしる事、但し予子之妻は、後之を以てしる事、予子之妻は、後之を以てしる事、予子之妻は、後之を以てしる事

慶長十四年七月十九日

會津四家合考附録云慶長十五年庚戌九月十日捨永樂通寶錢用京錢京錢者歷代之雜錢也傳云 大相國公一夕夢換城醒告忌於本多佐渡守佐渡守敬白是公不所可患志路可相換大易也以京錢換永樂 公允容其言終如此云其事倭俗謂錢曰代物代訓志路也故取義然也弘治百五十七年十一月十五日慶長年錄十四年八月云五年永樂錢也予子之妻也予子之妻也予子之妻也予子之妻也

定以爲之御定ニハ永年と爲方ニ有之也曰
 身代官元俄ニ永年ヲ用ケルヲ國東町ニ商人又
 永年ヲ用ケルトハ永年ヲ用ケル事ヲ不斜サ
 ルカ果メテ永年控ニ永年錢スリケレハ臣交モ
 商人無墜止不可傷計

正誤

大明會典弘治十年初撰 卷一百九十四錢 鑄云永樂

六年鑄永樂通寶錢卷三十一 法云永樂九年令差

官於浙江江西廣東福建四布政司鑄永樂通寶錢

弘明名圖書多載之と云六年九年二度記之は是は極く多し
 淨官國印ハ六年のよりりし極くは六年ハ多載之は清たると
 記之し 成祖九年

明史葉食 云成祖九年鑄永樂通寶錢明史是は因し
 成祖九年ハ即永

樂九年

及心模川記を據て之を元年既く永年辨也
 清たりと云々中興治亂記 應永十年了

聖朝路紀萬歷
 年正著

皇朝の傳記と一の昂元年とあるが
丁未の明人の六年といひ九年といふは
疑ふ所なれどもおのづから盛に行はし
として付く一ありともさへんや

泉貨鑑卷之十五云按之永樂錢大明成
祖九年二鑄トコナリ云々永樂渡来ノ事ハ武

家盛表記上總介忠輝ノ譜曰應永十八癸未年
八月二日云々唐船一艘相州三浦カ崎ハ漂着ス

リ云々永樂百萬貫ノ積來スリ云々
弘賢曰余ハ永
平表ハ盛
記云應永十年とあり癸未昂十年の干支より推して
明史亦永九年と云々云々云々ハの字もかた

る云々一從十八年とあり癸未と改るハ鳴呼スル所あり
明史の云々一今無シリ云々一云々一云々一云々一
ハ中古は記述云々一云々一云々一云々一云々一
くハ七云々一云々一云々一云々一云々一云々一
亦云々の云々一云々一云々一云々一云々一云々一
云々一云々一云々一云々一云々一云々一云々一

寶貨事略云庶苑院々々義由御國の勅書
と云々一云々一云々一云々一云々一云々一
新一ハ云々一云々一云々一云々一云々一
家國一云々一云々一云々一云々一云々一
弘賢曰云々一
庶苑院の勅書
云々一明の云々一云々一云々一云々一云々一
云々一云々一云々一云々一云々一云々一云々一
亦云々一云々一云々一云々一云々一云々一云々一
云々一云々一云々一云々一云々一云々一云々一

